



秋田県地域おこし協力隊 OB・OG ネットワーク

一般財団法人秋田県職員互助会 令和2年度公益事業助成事業 地域おこし協力隊と地域の関係づくり事業

協力隊は卒業してからが面白い

現役の『地域おこし協力隊』のとき、山形県の協力隊卒業生からもらった言葉。協力隊卒業を控え、地域に残るのか、仕事はどうするのか、不安でいっぱいだった。最長3年間、協力隊として精一杯活動した時間は、未来から振り返って自身にとって意味があるのか、当時はまだわからない。そんなとき、卒業生から「協力隊として働いてよかった」と、実体験を踏まえた感情のこもった感想・応援の言葉を聞いたことはとても嬉しかった。

秋田県の『地域おこし協力隊』の定着率は全国的にみて長い間低い数字でした。その数字を受け止め、一步一步協力隊の受け入れ体制の充実に向けて取り組み、

今その成果が出てきています。秋田でお世話になった私たち協力隊卒業生は、現役の協力隊の方々にも同じ思いになってほしいという気持ちから、2020年に団体を立ち上げ、行政・研究者・民間と連携して協力隊の支援に取り組みはじめました。そして、その第一歩である一つの成果・過程がこの冊子になります。

この冊子を手にとってくださった方々のなかに、もし現役協力隊の方（または協力隊卒業生の方）がいたら、『協力隊は卒業してからが面白い』と思えるよう、共に取り組んでいけたら幸いです。

一人の人が協力隊を卒業したのち、より一層豊かな関係を地域と育んでいけますように。

あなた、
誰ですか
!?



編集

秋田県地域おこし協力隊 OB・OG ネットワーク

トータル ディレクション・デザイン

澁谷和之(澁谷デザイン事務所)

写真

鄭 伽伽 (小宇宙感光)

研究協力

工藤尚悟(東京大学大学院)

須藤 順(高知大学)

編集協力

森 将太(藤里町 地域おこし協力隊)

張 梨香(五城目町 地域おこし協力隊)

根岸那都美(初恋デザイン | 元 藤里町 地域おこし協力隊)

柳澤 龍(一般社団法人ドチャベンジャーズ | 元 五城目町 地域おこし協力隊)

一般財団法人秋田県職員互助会 令和2年度公益事業助成事業 地域おこし協力隊と地域の関係づくり事業

2021年3月発行



《主題分析》

まずは……

今現在、秋田県内で現役の「地域おこし協力隊」として活動している方々、そして、協力隊を卒業後に秋田県内で活動が続けている方々に、普段の活動のなかで感じていることを素直に言葉にしてみました。

- 地域との関係性のつくり方
- 課題として見えてきたこと
- 大変だったこと 悩んだこと
- 協力隊としての働き方

○地域との関係性のつくり方

やっぱりできない自分をさらけ出すのも大事だなと思いました。やっぱりできないことばかりなんですよね。行事も知らないし、仕切り方も分かんないし、常識もないし。それを分かったフリをしていても誰も力を貸してくれないし、それこそ強がってるだけだなって思っちゃって。

『できない自分をさらけ出す』

今は失敗とかでも恐れずに、というか、できなくても当たり前だからむしろ先に分らないことについては聞いたほうがいいなと。後々になって分からないフリをしているよりは、最初に「分かんない」って言えた方がいいみたいな感じになりましたね。



○大変だったこと・悩んだこと

地域を助けに来てくれた、みたいな書き方をされたりすると、「なんか、そういうつもりじゃないんですけど……」みたいな気持ちがあって、僕らができることって、そんなに大きなことなのか、どうなのか、ちょっと分からないくなるんです。

そういうふうに、最初のタイミングで期待感を持って協力隊を取りあげてくださるマスコミの方もいたりするので、そうすると、逆に生きづらくなることもあるかな……て思いますね。

『“いい人”イメージの先行』

やっぱり、重荷だったんじゃないですかね。地域のために、なにか動かしや、みたいな。でも、市役所はこうしろって言うし。

『地域を興さなきゃというプレッシャー』



写真：森将太（藤里町 地域おこし協力隊）

『なぜ移住してくるのか、理解できない』

最初私が協力隊として来た時「どうしてデイズニールランドに30分以内に行ける場所に住んでいたのにこんなところに来たんですか？」って会う度に聞かれてたんです。いや、別にデイズニールランドに何年かには一回は行くかもしれないけど、毎週行くわけじゃないから、30分以内にあることにそこまでの価値を求めるよりかは、日々いる場所としてここに来てみたんだよ、みたいなことを言っても分かってもらえない。

「わざわざデイズニールランドが近い場所を捨ててくるなんて分からない」ってよく言われてたんだけど、多分そう思った人たちも、田舎の捉え方を「こんな何もない場所なのに……」ではなくて、「ここ（秋田）だからこそ来たいとか、ここでやりたいとか、そんな良さがもしかしらここにはあるのかな？」という感じ方・捉え方ができるようになれたらいいのかなと。

○課題として見えてきたこと



5 |



『がんばらなくても死なない』

○協力隊としての働き方

がんばらなくても死なない。「地域おこし協力隊」って、真面目な人ほどダメになるシステムなんじゃないかなと思うことがよくあって。別に私、そこまで真面目ってわけじゃないですけど……。気を抜いていいところで気を抜けないような人だと、死んじゃうシステムな気がして。

別にそこまで真面目ってわけじゃないのに、何か本当に、協力隊時代、ゲロ吐いて、下痢して、ニキビぶわって

できて、みたいな。それが普通の通常運転だと思ってたら、協力隊卒業した途端に、ゲロも吐かなくなったし、下痢もしなくなったしで、あ、これが健康体だみたいな。だからなんて言うんですかね？

死なないでほしいな、みたいな。

| 4

地域に出て必ず聞かれる質問

協力隊の卒業生の経験に基づいた言葉は、現役の地域おこし協力隊の本当の気持ちを肯定してくれる。

ある協力隊は、住民に出身地を聞かれることが嫌だった。避暑地で有名な地域から移住し、「なんでそんなにいい所から移住したの?」と聞かれる。私は私の思いがあつてきたのに、それを否定された気持ちになる。

協力隊卒業生の経験談を読み解き、それについて現役協力隊と話すうちに、「自分の人生としてここにいたい」のだから、「なぜ?」の問いに惑わされる必要はなく、逆に「なら、なぜみなさんはここに暮らしているのか?」と問い返すくらいの気概で良いのだ、と思えるようになった。



協力隊という「肩書き」が背負わせるもの

協力隊の多くが感じている悩みの一つが、『協力隊』という肩書き。地域の人たちからは一個人、住民としてではなく、協力隊を前提にした関係になつてしまふ。その名を背負い、地域のためにやらなければならない使命感みたいなものが、重荷になることもある。「キャリアのひとつでしかないん

だけどね」「一生〃地域おこし協力隊〃の名前を背負わなければいけないのか?」。『協力隊』だからといって高見の人でもスーパーマンでもないし、平場の一人の人間として関わってほしい。でも、地域から税金で生活している人への目は厳しいのが現実。



写真：森得太

課題解決ではなく対話のきっかけを

当初は一人ひとりについて理解してもらうために、協力隊の活動をまとめた冊子を制作しようと考えていた。もし冊子を作った場合、誰に読んでもいいのか? どこで配布するのか? 渡しても読んでもらえるのか? さまざまな角度から議論した。でも、冊子を作っても読んでくれるのは、きっと知り合いの仲良しくらいで、既にある関係性からの会話の拡がりだけを目指し

ているのではないことに気がついた。作ったものは気軽にいろんな方に手にとってもらいたい。手渡すことで相手と真つさらな状態から一人の人間として対話したい。背負ったものを下ろすのではなく、共に支えていく仲間が欲しい。その一つの方法として、『ポケットティッシュ』に自分を紹介・PRするチラシを織り込んで手渡す関係性作りのデザインに辿り着く。



写真：森得太

肩書きを再定義するポケットティッシュ

ポケットティッシュに織り込んだ自己PRのチラシには、市町村と名前(苗字)だけが記されており、広げてみると自己紹介がフリーフォーマットで描かれている。それを読むだけでは『協力隊』という肩書きは見えてこないが、裏面を見るとこのチラシが作られた経緯・思いが書かれており、ここで初め

て〃この人が協力隊であること〃が明かされる。普通の名刺だと「協力隊の〇〇さん」になるけど、敢えてその入口から逸脱することで協力隊の肩の荷を下ろし、まずは〃一人の人間〃として知ってもらうことを目指した。協力隊が秋田に共に暮す一員として受け入れられることを願っている。



A photograph showing a red apple with a small stem in the foreground, resting on a dark blue fabric with a white floral pattern. Behind the apple is a stack of white papers or envelopes, some of which are wrapped in clear plastic. The background is a light-colored wooden surface.

地域のみんなが『協力隊の協力隊』で
あれたらいいのにな。
そうすれば、そこには、
『力』がイッパイあるのにな。